

子どものリハビリ継続中

2014年の夏、イスラエル軍のガザ侵攻戦争から4年。数千人といわれる負傷した子どもたちの訪問リハビリを継続して3年になりました。重度の障がいを抱えた子どもたちは、リハビリを懸命に続けています。幼かった子どもたちはどんな思いで、この4年を生きてきたのでしょうか。

〈2013年生まれのイブラヒムは、現在5歳〉

2014年の戦争のときは1歳半で、爆発による負傷で脊髄が損傷、両下肢が完全に麻痺し、感覚もなくなり、足の裏を刺激しても反応がなくなりました。また、一緒にいたお母さんを失いました。麻痺のため、左右に寝返りを打つこともできなくなりました。もちろん、車いすからの乗り降りも自力ではできず、つま先は全く動かすことができませんでした。背中を立てて座ることもできませんでした。

お父さんは再婚をしてイブラヒムは取り残され、祖父母が世話をしています。理学療法士によれば、イブラヒムはとても攻撃的だったのですが、心理専門家が遊びのセラピーをし、家族や医療チームの励ましによって、リハビリに抵抗したり暴力的にならずに応えるようになってきました。

医療チームは、両足の血行を良くし、関節の硬化や筋収縮など合併症を防ぎ、下肢全関節の可動域を広げて、筋肉をつけること。また膝立ちや這いながらで移動できるようになるため、上肢の筋力を強めることを目指して、週3回のリハビリを続けています。足裏の刺激に反応し、つま先が動くようになりました。

いまでは、車椅子に自分で乗り降りし、子ども用の自動車のおもちゃが気に入って、それにも自分で乗り降りを始めました。時折笑顔を見せるようにもなりました。



1年半前のイブラヒムとお祖父さん。自分のレントゲンを見ている



自力で車椅子に乗れる

車椅子まで這っていく



マハの描いた海の絵



両手で鉛筆を握るマハ。右は理学療法士

〈海を描いたマハ〉

爆撃で、お母さんと妹二人を失ったマハ（12才）。本人も脊椎を負傷し、下肢が麻痺し、腕も曲がらなくなり、指も使えなくなりました。お父さんやお姉さん、叔母さんたちが懸命の介護をしてきました。医療チームも週に2から3回リハビリを行ってきました。

相変わらず麻痺は続いているが、気持ちはだいぶ前向きになり、食事も少し取るようになりました。勉強が好きだったマハ。リハビリとして、両手を使って文字を書く練習をずっとしていましたが、最近では絵を描くようになりました。

海岸では子どもたちが遊び、泳ぐ準備をしています。海の中では魚が海草の中を泳ぎまわり、漁師のボートも見えます。海草の絵を描く子どもは少ないので、テレビで海中の様子を見たのかもしれない。

子どもたちは今後、就学したり思春期を向えます。家族や医療チームとともに、こうした子どもたちが少しでも安心して生活できるよう、継続した支援をしていきたいと思っています。